

プルースト的「気象学」<sup>1)</sup>

「かつてある本で読んだ名前は、そのシラブルの中にそれを読んでいたときの突風と照りつける太陽を含んでいる。」(IV, 463)<sup>2)</sup>

田 中 良 \*

<La météorologie> proustienne

Ryo TANAKA

## はじめに

天地開闢以来、天の運行は人々の生活に基大な影響を及ぼし、人々はときにはその恵みに感謝し、ときには人知及ばぬその力に畏怖を覚えてきた。ギリシア・ローマ時代におけるアポロン(太陽神)、ポセイドン(海神)、アルテミス(月の女神)、ボレアス(北風)、ゼピュロス(西風)、ノトス(南風)、エウロス(東風)などの、気象にまつわる神々の創造は、その表れであろう。以来、気象の変化と神の力の蜜月は、少なくともフランス文学史上、18世紀まで続く。確かに1597年にガリレオの温度計発明とともに気象学は観測時代にはいり、1643年にはトリチェリが気圧計を発明し、1664年にはパリで定期的な気象観測が始まっているが、文学的、とりわけ小説の世界でみる限り、気象の変化は神の力と一体化していた。つまり人々に被害をもたらす気象は、神の怒りであり、逆にいえば神の存在証明であった。それを象徴しているのは、18世紀のベルナルダン＝ド＝サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』において、ヴィルジニーの乗った船を転覆させる暴風雨であり、サド侯爵の『悪徳の栄え』において、心優しいジュスチヌを最後に直撃する雷であろう。しかし19世紀になって天気図が作成され、暴風雨警報<sup>3)</sup>が発令されるに及んで、気象は神の力から解放され、今度は小説におけるひとつの機能として利用され始める。とはいえ、この世紀前半のバルザック、スタンダールといった、外的状況に左右されず、自らの欲望、意志を貫こうとする人物を描いた作家よりむしろ、周辺の変化に翻弄される人物を主に描いた、後半のフローベール、モーパッサンの諸作品にその傾向は顕著である。例えば『感情教育』の有名な冒頭は、早朝、蒸気と霧にまみれた出帆間際の船上であり、その霧はいかにも宿命的な出会いにふさわしく演出され、『ボヴァリー夫人』では、良い気候を求めての転地がエンマの運命を決定する。モーパッサンの『女の一生』も、あたかも主人公ジャンヌの波乱に満ちた半生を予告するような豪雨の描写から始まり、最後は今後の彼女の幸せを象徴するかのような夕日に映える花畑の中を、彼女が赤ん坊を抱きながら馬車で走り去る場面で終わっている。20世紀にはいっても、ジッドの『田園交響曲』は「こ

れで三日も降りやまぬ雪が、道をふさいでいる」<sup>4)</sup>という一文で始まり、ロマン＝ロランの『ジャン・クリストフ』も、窓ガラスを打つ雨の場面から始まる。サルトルの『嘔吐』でさえ、最後の一文は、「明日ブルヴィルには雨が降るだろう」<sup>5)</sup>である。これらの作品は、気象状況を小説内の一つの機能として利用している限りにおいて、極めて古典的と言わねばならない。

ではブルストにとっての気象とは何か、また『失われた時を求めて』の中において気象はいかなる働きをしているか、これが本論のテーマである。

## I. 差異化

ブルストにおける気象は、差異化する。気候の違いによって特徴づけられる、土地がその差異化の対象となるのは当然であろう。祖父によると、コンブレーとパリは、田舎町と大都会という対立と同時に、一方で天気の良いときには他方で天気が悪いという正反対の天候によって位置づけられる(Ⅱ, 637)。コンブレーとヴェネチアも、コンブレーでは錠戸の閉ざされていた時刻に、ヴェネチアでは開け放たれた窓から「緑がかった太陽の光」(Ⅳ, 224)が差し込み、風が吹き抜けていた、という気象状況によって異なり、ドンシエールも、絶えずうなっている強風によって特徴づけられる。土地ばかりではなく、この小説では、日々の生活はその日の天気に左右され、登場人物は様々な天候に対する対処の仕方によって性格づけられる。すなわちこれは、気象による差異化の問題である。

周知の通り、コンブレーにおける主人公一家の生活は、その日の気象状況によって決定される。雨の日には家で過ごし、降っていない日には散歩にでる。その散歩についても、曇り空の日には近くのスワン家の方へ、晴れている日には足をのばしてゲルマント家の方へ、というようにその日の天気次第でコースが決められている。また夕食後の団らんも、天気のよいときには庭で、悪いときにはサロンで行われている。パリにおいても、主人公がシャン＝ゼリセ公園でジルベルトに会えるか否かは天候次第で、それゆえ彼はバルコニーに漂う陽光の明暗に一喜一憂する。スワン夫妻と知り合った後も、彼はこの夫妻と晴れた日にはブローニュの森を散歩し、天気の悪い日にはコンサート、観劇へ、寒い日には展覧会にゆく。天候は主人公にとっての行動原理でもある。

日々の生活だけでなく、様々な登場人物たちの性格も、天候に対する対処の仕方によって浮き彫りにされる。もちろんこれは、小説における古典的手法のひとつである。例えば、バルザックの『谷間の百合』では、老貴族モルソー伯爵は「あたりの空気のごく些細な変化に絶えず気を配って、ひっきりなしに着物を着たり脱いだりしながら、それこそ晴雨計の目盛りを見ずには何ひとつしようとはしなかった」<sup>6)</sup>のに対し、モルソー夫人と主人公フェリックスは、激しい雨が降り出したのにも気づかず二人の絆を確認する<sup>7)</sup>。『感情教育』では、アルヌー夫人は、「森の中の風の音、雨の中を帽子も被らず歩くのが好きだった」<sup>8)</sup>とされ、夫人に恋するフレデリックは、「雨が降ったら約束の場所へ行けない人とは違います」<sup>9)</sup>といて、暗に以前雨の日に夫人に対する約束を反古にされたことへの不満を述べるとともに、自らを差異化している。ロブ＝グリエにしても、『嫉妬』において「Aは暑さもそうだが、寒さにも平気で、どこに行っても気楽に暮らせるのだ」<sup>10)</sup>とし、それに対し「友人のフランクの妻クリスチーナは、ここ暑くて湿った風土にうまく適応しないのだ」<sup>11)</sup>とすることによって、この二人を対象的な女性として位置づけている。

ブルストも当然この手法を駆使しているが、その主要な方法は、天候に対する対処の仕方によって二人の人物を対立させることである。そうすれば両者の差異が鮮明に浮かび上がってくるのである。最初の対立は、主人公と父の間に見いだせる。彼らは、天気の見み方において

違っている。気象学好きな父は晴雨計によって天気を判断するのに対して、主人公はカーテンやバルコニーに漂う陽光、窓ガラスにあたる雨音、路面電車の走る音、ときには眼鏡屋の店頭で置かれたカプテン僧の格好をした晴雨人形を通して判断する。計量化された天気を信頼する父に対し、主人公は自らの感覚、感情を通して天気を判断する。この父は、主人公の教育に関して祖母とも対立しているが、そのときも問題は天候である。雨の日には息子に家で読書させようとする父に対し、祖母は雨や風は孫の健康のために良いという判断から、その模範として庭に出て雨に打たれる。バルベックにおける主人公とアルベルチヌの対立も同じ構図である。主人公は雨の日はカジノで過ごすのに対し、彼女は雨の中「ゴム製の戦闘服に身を固め」（Ⅳ，70）、自転車という「神話的な車輪」にまたがって、通りの人々を脅かしながらバルベックの通りを突っ走っていた。この二人は、パリでの共同生活においても、就寝時の窓の開閉で対立する。二人は別室に起居していたのだが、彼女が夜窓を開けていると主人公の部屋にすきま風が入り、それが彼の喘息を誘発することから、彼はアルベルチヌに夜窓を開けないことを約束させていた。それが彼女には息苦しかった。それ故彼は、深夜彼女の部屋から物音がすると、「こんな生活、息が詰まるわ。ええい、私には外の空気がいるのよ」（Ⅲ，903）と言って窓を開け放ったかのように聞こえ、身震いするのである。結局、彼女は別れも告げず出て行くが、すきま風というささやかな大気の流れが二人の対立を浮き彫りにした。同種の対立は、主人公とサン・ルーの間にもある。主人公が初めてこのゲルマント公爵夫人の甥を見るのは、バルベックの食堂の中からであり、その時サン・ルーは酷暑の中を「太陽光線をことごとく吸収してしまったかのように髪を金色に輝かせながら」（Ⅱ，88）食堂の前を歩いていた。主人公が食堂の中という厳しい天候から保護された状態にあるのに対し、サン・ルーは戸外で天候に身を晒すことによって、主人公との差異を強調し、それによって一層彼の関心をひくのである。ついでに言えば、アルベルチヌとの関係において一つの重要なエピソードを作り出したすきま風は、サン・ルーの間でも問題になる。それはドンシエールで、サン・ルーがいきつけのレストランに主人公を連れていったときのことである（Ⅱ，692-696）。御者と話をしているサン・ルーを残し、主人公は一人先に店に入るが、案内された場所は入口のドアの前で、冷たい外からのすきま風が吹き込んでいる。サン・ルーはすぐにその状態から彼を救い出すが、アルベルチヌのとき離別の予兆となったすきま風は、ここでは二人の結束を高めている。

このように気象は『失われた時を求めて』において、様々な人物のコントラストを強調しているが、『ジャン・サントゥイユ』<sup>12)</sup>と比較すると、興味深いことがわかる。すなわち、『ジャン・サントゥイユ』において天候によって生活を左右されないのが男性であるのに対し、『失われた時を求めて』では女性の方であるということである。実際、『ジャン・サントゥイユ』では主要な男性の登場人物であるサントゥイユ氏<sup>13)</sup>も、ルビック氏<sup>14)</sup>も、作家C<sup>15)</sup>も全く天候の変化を気につけないのに対し、『失われた時を求めて』では主人公はもとより、父は前述した通り雨の日は息子に読書を勧め、旅行に出かけるとなると天気を心配して数日前から晴雨計から目を離さない（Ⅰ，385）。フロベルヴィル将軍も、別の動機、つまりサン＝トゥーヴェルト夫人のガーデン・パーティが天候不良で流会になるのを期待して、彼も晴雨計を見つめる（Ⅲ，76）。またルグランダン氏はある婦人に晴雨計を贈り（Ⅳ，245）、ゲルマント公爵はその日の気温に応じて服を着替える（Ⅱ，331-332）。彼ら男性に対し、この小説の女性たちは、天気を気につけない。前述の通り祖母もアルベルチヌも、雨も風も気にしない。ジャン＝ピエール・リシャールによると祖母は「風を操作する役目」<sup>16)</sup>をもっている。この小説ではあまり雨傘は登場しないが、雨傘を持ち歩くと言う行為は、行動を天気によって左右されたくないという意志のひとつの表れであろう。とすれば、それを実行しているのもこの小説では女

性たち、つまり祖母、母、ゲルマント公爵婦人である。祖母の死後、主人公の母は祖母の残した「晴雨兼用」(1'《en - tout - cas》)の傘をもってバルベック浜辺を散歩し(Ⅲ, 167)、神秘性をなくした後のゲルマント公爵夫人は天気が悪くても歩いて買物に出かけ、雨模様ときには雨傘をもっていることもあった(Ⅲ, 540)。彼女たちに対し、男性であるスワンの場合なら、母が見たと言う「雨傘売り場のスワン」(Ⅰ, 407)とは非現実的な、まさしく「群衆の中の超自然的姿」であり、主人公の場合なら、雨傘は雨を防御するためのものではなく、雨上がりのモンジュウヴァンのように感激した主人公に振り回されるためにある。その他この小説で天気を苦にしない女性として、毎日曜日雨でもレオニ叔母を訪問するユーラリ、どんな天気でもシャン・ゼリセ公園で『デバ』紙を読んでいる婦人をあげることができる。J・フランシス・レイユは、ブルーストの実生活から創作への移行の段階、さらに創作の初期の段階における父系から母系への傾斜を論じている<sup>17)</sup>が、その傾斜は気象の変化に対する対処の仕方に関して、『ジャン・サントウイユ』から『失われた時を求めて』への移行においても見いだされるのである。

このように気象は、日々の生活、様々な人物の性格ばかりでなく、『ジャン・サントウイユ』と『失われた時を求めて』の差異の一端をも露呈させている。

## II. 記 憶

ブルーストにおける気象は、共時的には主に差異化として働き、通時的には主に結合の働きをする。確かに共時的にも、風のように対象を結び付ける気象もある。主人公とサン・ルーの結末を高めた、ドンシエールのレストランでのすきま風もそうだが、むしろメゼグリーズではジルベルトからの、ドンシエールではゲルマント公爵夫人からのメッセージのように思えた風、バルベックでは離れたところで絵をかいているアルベルチヌとの間に絆を感じさせた海風(Ⅲ, 400)、そうした風に共時的な結合作用、つまり空間的に隔たった存在を結び付ける作用を見いだせる。しかしこの結合作用は、主に時間的隔たりの中で起こり、そのとき問題になるのが、過去を喚起させる気象と記憶の関係である。

最初に確認しておかねばならないのは、過去のイメージにおける、ひとつの核としての気象状況の位置である。ルソーは『告白』において、初めてヴァランス夫人に会った「幸福な場所のまわりに黄金の垣をめぐるすこと」<sup>18)</sup>を夢みているが、ブルーストの場合、場所だけでは不十分で、そのときの気象状況をも含めた空間全体に「垣をめぐるさ」ねばならない。コンプレーで初めて一晩母を独り占めし、後年母が理想を放棄し、主人公の意志の凋落が始まった日付として深く彼の記憶に刻み込まれることになる夜、その夜の思い出には、部屋の窓から差し込んでいた月の光が欠かせない(Ⅳ, 621)。また雪のためジルベルトに会えなくなった日に読んだベルゴットの本には、いつまでもその時の雪がのっているように主人公には見える(Ⅳ, 465)。スワンは、ヴァントウユのソナタを聴きながら、オデットとの失われた幸福のエッセンスとして「菊の花びら」、「手紙に書かれた『メゾン・ドレ』の住所」、「寄せられた眉」、「理髪師のこての匂い」、「春雷」、「凍てつく帰宅」(Ⅰ, 340)を列挙しているが、このときも「春雷」と「凍てつく帰宅」という気象の要素は忘れられていない。こうした過去のイメージと気象の結び付きをブルーストは次のように美しく表現している。

「かつてある本で読んだ名前は、そのシラブルの中にそれを読んでいたときの突風と照りつける太陽を含んでいる。」(Ⅳ, 463)

この両者の密接な関係から、過去のイメージとそれを喚起させる気象状況の問題が生じてくる。これは、一般に私たちが「ああ、あのときもこのような大雨だった」と思わず口に出した

り、作品中で語り手が「着いた当初はバルベックに彼女がいることを知らなかった。では誰からそのことを知ったのか。そうだ、エメからだ。今日のこの日のようにいい天気だった」(Ⅲ, 56)と語るような体験を意味する。言い換えれば、現在のある気象状況が同じ状況下にあったある過去を思い出させる、気象における喚起力の問題である。例えば、ドンシェールでの深い霧の夜は、かってコンプレーに遅く着いた夜を思い起こさせ(Ⅱ, 691-692)、息が詰まるほど暑い日、あるローカル線で日差しを避けるため日除けを下ろしたところ、そこから差し込む太陽の光で、かってバルベックに向かう列車に座っていた祖母の姿が卒然と蘇る(Ⅲ, 180-181)。強烈な天候だけでなく、ささやかな雨、日差し、穏やかな空気、風などでも同じである。

「雨の音でコンプレーのリラの匂いが、バルコニーに漂う陽光でシャンゼリゼの鳩が、暖かい朝に響く騒音でさくらんぼの新鮮さが、風の音と巡ってきた復活祭でブルターニュやヴェネチアへの欲望が私に立ち戻ったのだ。」(Ⅳ, 60)

考えてみれば、これは一種のレミニサンスである。この小説の要となる様々なレミニサンスのように、作品構造上の役割は果していないが、過去を無意識的に喚起させる点ばかりでなく、偶然に依拠している点でも気象はレミニサンスの力をもっている。

「それほどに大気は、日々の偶然に従って、私たちの身体に深く作用し、入れたまま忘れてしまっていた薄暗い貯蔵室から、記憶で解説できなかつた登録済みのメロディーを引き出してくる。」(Ⅱ, 441)

気象のもたらす回想への信頼も、この偶然性から出ている。気象の変化は、意志と知性を越えた偶然に支えられているが故に、主人公にとってはひとつの現実として意味をもつのである。ゲルマント公爵夫人の服装の美しさは、天候と比較されて次のように述べられている。

「これらの衣裳は、意志的に取り替えのきく、なんらかの背景ではなく、その日の天気やある時刻の特殊な光のように、与えられた詩的な現実であった。」(Ⅲ, 542-543)

主人公の家を訪問したブロックは、雨に降られた言い訳として「僕は物理的偶然性の外に生きていますので」(Ⅰ, 91)と述べ、さらに昼食に1時間半も遅れたうえに、泥まみれになって来たときには「僕は大気の変動にも時間の因習的な区分にも影響されません」と述べて、家族全員の不興をかったが、ブルーストにとってそうした「物理的偶然性」、「大気の変動」こそ感性を刺激し、記憶の糸をたぐり寄せる働きをするのである。ブルースト的感性は、この「物理的偶然性」に基づく「大気の変動」に左右されて発達するともいえるのである。『ジャン・サントゥユ』では次のように述べられている。

「けれども子供の知性と感受性は、一筋の陽の光や、またそれ以上に突然降りはじめた雷雨などの偶然に左右されて、不規則に発達するものである。」<sup>19)</sup>

この「子供の感受性」こそ、ブルーストが大人になっても失わなかったものである。従って、語り手の「わたしたちの記憶の最良の部分は、わたしたちの外、すなわち雨を呼ぶ風や、部屋にこもった匂いや、燃えだした薪の最初の匂いの中にある」(Ⅱ, 4)という言葉には、逆説的な意味は込められていないのである。

このように気象は一般的な意味でのレミニサンスには違いないが、『失われた時を求めて』におけるレミニサンスとの根本的な違いは、作品構造上の問題は伏せるとすると、その瞬間の衝撃力の違いであろう。次に挙げるように、ブルースト的レミニサンスは、人生を一変させるほどの衝撃力をもっている。プチット・マドレーヌのときは「それ(甘美な快感)は、人生の有為転変をどうでもいいものに、災いを無害に、人生の短さを見せかけのように感じさせ」(Ⅰ, 44)、ゲルマント大公夫人邸での一連の体験のときにも、その一瞬は「将来への不安、知的疑惑のいっさいを消し去り」(Ⅳ, 445)、「わたしを失望からひきだし、文学への信頼

を取り戻させていた」(IV, 447)。気象も、未来への展望を開く可能性をもってはいるが、どちらかというと例外的で、一般に気象の変化は未来ではなく、過去へ立ち帰らせる。とりわけアルベルチヌの死後、この傾向は強まる。彼女の死後、主人公は中庭で星をひとつ見ただけで、月の光の中アルベルチヌとシャントビーの森を散歩したという「苦い思い出」を想起し、夜明けの最初の冷気を感じると彼女と過ごした夏の快さを思い起こして身震いし、霜がおり始める頃になると、

「ほとんど一晩中アルベルチヌを空しく待ったあの夜、あの雪の夜に似た夜がまた戻ってくるのだと思うとき、(…)私の悲しみにとって、私の心にとって、最も恐ろしいのはたいへんな寒さがまた戻ってくることだった。」(IV, 66)

この相違は、気象とレミニサンスが精神に及ぼす影響の違いから生じているように思える。レミニサンスの瞬間が、主人公に「超時間的存在」(un être extra-temporel) (IV, 450)の印象を与えるのに対し、気象は自我を離れきれず、かつての欲望、苦しみをまごったままの自我を喚起するためであろう。すなわち、

「大気の変化は、内部の人間に同じほどの変化をもたらし、忘れ去られていた様々な自我を呼び覚まし、習慣の眠りを覚まし、しかじかの思い出、苦しみに再び活力を与える」(IV, 72)

のである。従って、「切断手術をうけた人のように、天候のわずかな変化も私のなくなった手足の部分に新たな苦痛を感じさせるのであった」(IV, 73)。この苦しみの喚起という点で、気象はレミニサンスと異なり、さらに『失われた時を求めて』と『ジャン・サントゥイユ』をより隔てているのである。

### III. 音楽の誕生

ブルーストの関心は、停滞する気象ではなく、日々微妙に変化し、ときには驚くほどの変動を見せる気象にそそがれている。それは、彼が気象の変化と精神的な変化の間に類縁性を読み取っているためであろう。彼はしばしば、他の作家と同様、精神的な変化を気象の変化に例えて表現し、その中でも彼が好んだのは、急激な心理的動揺に対する「嵐」の比喩である。例えば、ジルベルトとの別れのきは「それまで穏やかに晴れていて、揺らぐ気配もなかった魂の中に突然低気圧が生じ、最後まで戦いぬけるかわからないほどの猛烈な嵐を引き起こし」(I, 574-575)、アルベルチヌの去向こうとしているヴェルデュラン家にヴァントゥユ嬢が招かれているのを知ったときは、彼は心の中で「それまで目標として準備されていた幸福は崩れさり、太陽は隠れ、羅針盤は方向転換し、内心の嵐は吹き荒れた」(III, 729)のを感じる。ブルーストの場合、これらの「嵐」は、表現上の効果を狙った修辞学上の結果ではなく、気象と精神との発生段階における構造的類縁性に由来している。彼は精神的変化を気象の変化に例えて、次のように明確にそのことを述べている。

「それ(思い込み)は、わたしたちの周囲に、変動しやすく、ときには快適だが、しばしば息苦しくさせることもある大気を作り出しているので、気温や気圧や季節と同じように、慎重に読み取られ、記録されるだけの価値はある。」(III, 655)

あるいは、

「愛の中であってさえ、私の内的大気の変わりやすい状態、思い込みによって変更される気圧、それらは私の本来の愛を、ある日は見えにくくし、ある日は無限に広げ、ある日は微笑むかとはばかりに美しくみせ、またある日は雷雨になるほどに収縮させなかったであろうか。」(IV, 70)

ブルーストにとって精神界は、意志や知性によって管理、抑制できるものではなく、大気現象のように偶然性に左右されながら刻々と移ろいゆくものなのである。いわば、宇宙に大気現象があるように、ブルーストのミクロコスモスにも内的気象があるといえる。

こうした類縁性は、同時に連動性を生み出す。気象の変化に応じて過去のイメージが喚起されたように、気象の変化と連動して精神的にも何かに変化するのである。寒気の再来がアルベルチヌとの苦い恋を想起させ、ヴェルデュラン氏の「天気が変わったようですね」（III, 365）という一言が主人公を歓喜で満ちし、彼に「いくつもの可能性」を垣間見させるのは、その表れであろう。そしてその連動性の中に音楽を発見するところにブルースト的感性がある。気象の変化が精神的变化を呼び起こし、それと同調することによって、心の中に音楽が誕生するのである。一例を挙げれば、有名な雨の一節がある。

「まるで何か当たったかのように、窓ガラスに小さな音、その後、窓から上に落とした砂粒のように柔らかく軽い落下、次にその落下は、広がり、規則正しくなり、リズムを帯び、流体的で、響きもち、音楽的に、無教に、どこまでも広がってゆく。雨だった。」（I, 100）

なるほどこの例は、雨音と音楽の関係が余りに直接的すぎて、連動しているというより、単純な類推の域を出ていないように思われるかもしれないが、同じ音でも次のような煙突から暖炉に吹き込んだ風による例、つまりその風によって引き起こされる通風の鉄板の音が、ベートーベンの『短調シンフォニー』（II, 641）の冒頭のヴァイオリンを聞いたときと同じ感動を覚えさせるという例には、十分ブルースト的感性を感じることができる。聴覚的にはもちろんのこと、視覚的にも気象は音楽を生み出す。バルコニーに現れては消える、光の影の競演がそれである。

「窓の前のバルコニーは灰色だった。（...）しかし石は再び目にはつかないほど白くなり始めた、まるで音楽においてある『序曲』の終わりでひとつの音を最高潮のフォルテシモにまで高める連続したクレシェンドのように。」（I, 389）

別のところでは、朝窓のカーテンを開ける行為が音楽家のピアノの蓋を開ける行為に例えられている（III, 537）が、それも同じ連動性から出たものであろう。もちろんブルーストにおける音楽の誕生は、気象の変化をいつも伴うわけではなく、さんざしの匂いに感動したときも主人公は心の中で音楽を感じ取っている（I, 136）。にもかかわらず、気象と音楽の連動性を強調せねばならないのは、まずブルーストが次のように述べているためである。

「自然の急激な変化はすべて、事物の新しいあり方に私たちの調和した欲望を合わせることによって、それに似た変容を私たちにもたらす。」（II, 641）

さらに次のような、音楽の中における気象の誕生に立ち会うとき、この両者の類縁性、連動性を新ためて確認せざるを得ない。次の引用は少し長いが、ヴァントゥイユの七重奏曲を聞いたときの感動を語ったものである。

「ソナタは田園の純潔な夜明けからはじまったが、（...）今度の新しい作品（七重奏曲）は、嵐をはらむ朝、無限の広がり、刺すような静けさのただ中で、海面のような一律で平板な表面から始まった。バラ色の夜明けの中で、未知の宇宙が、沈黙と夜から引き出され、私の前で徐々に形成されていった。あの優しく、田園風で、無邪気だったソナタにはない、この新しい赤は、夜明けのように、神秘的な希望で空全体を彩った。（...）冷たく、雨に洗われ、電気を帯びた大気 — 純潔で、植物性に満ちたソナタの世界からかけ離れた世界にあり、非常に違った性質をもち、全く別の気圧をもった大気であるが — それは瞬間毎に変化し、黎明の深紅に染まった約束を消し去った。」（III, 754）

気象の変化が音楽を生み、音楽が再び気象を生み出すというブリスト的循環をこの引用から読み取れる。ではどちらが源泉か。ブリストは気象であるという。

「しかし私が、心の中のヴァイオリンの新しい音を陶醉しながら聴くのは、もっぱら自分の中においてであった。そのコードは、気温や外からの光の些細な違いで、締めもすれば、緩みもする。私たちの存在は、習慣の画一性が音を出させなくしている楽器であるが、その存在内で、音楽の源泉である歌は気温や光の差から生まれてくる。日々の天気は私たちをある音階へと移行させる。」(Ⅲ, 535)

このように、気象の変化は内的気象と連動して、心の中に音楽を生み出す。

## V. 病 気

ブリストにおける気象は、遍在している。ブリスト的存在は、どんな場所にあっても気象の影響を避けることはできない。戸外はもちろんのこと、室内にあっても、窓から、暖炉から風が吹き込み、閉めきっていても、外で食料品店の人が箱を叩く音でその日の光の状態が、路面電車の走る音でその日の湿度が読み取られる。教会の中については、『ジャン・サイトウイユ』では「いずれにしても教会の中は、晴れでも雨でもない<sup>20)</sup>」と、いかにも教会は中性的で、例外のように位置づけられているが、『失われた時を求めて』では一歩進んで、ステンド・グラスの影響で「外が薄曇りなら、教会の中は晴れに決まっていた」(Ⅰ, 59)と戸外と対比され、さらに進んで教会内においては、一つのステンド・グラスに描かれたバラ色の雪の山が窓ガラスを凍りつかせ、高窓から差し込む日の光は「フランボイヤン様式の、幻想的な雨」(Ⅰ, 59)となつて降り注ぐ。すなわち、ブリストの世界では、教会の中にあっても、雪が積もり、雨が降り、そして太陽が微笑むのである。こうした気象の遍在性は、逆に言うと彼の気象に対する異常と思えるほどの反応の証でもある。そしてこの反応をブリスト的感性と呼べる理由は、この作家を生涯苦しめた病、喘息にある。喘息故に、彼の感性は気象の変化に異常に反応したと考えられるのである。彼は、1904年8月11日付の母への手紙で、次のようにこ細かく喘息と気象状況の関係を報告している。

「ル・アーヴルまでは汽車の旅で、発作も息苦しさもまったくありませんでした。そのつもりでばくが風通しを完全にしておいたおかげです。一 駅でミラボー氏と会い、一緒に車で港まで行く。ル・アーヴル港に入ろうとしたとき、激しい喘息(息苦しさや発作はなく、喘息のみ)、船につくと、喘息はつるの一方ですが、息苦しさはまるでなし。(…)7時、出航。非常に呼吸がしにくいというわけではありませんでしたが、しかしとにかく我慢のできる状態で、朝食をとる。ついで喘息がおさまる。穏やかな海、快晴。(…)よく眠れたが、7時に激しい喘息で目がさめる。天気は雨になって、小雨が降っている。ばくの喘息は大いに船の湿気が原因らしい。(…)ボートはひどく風があって、また咳が出はじめた。」<sup>21)</sup>

ブリストの喘息は、9才のときブローニュの森で始まり、この手紙の当時は33才。彼はこの手紙にもある通り、旅に出たときは逐一母に病状を報告し、出かける前には知人に行く先の気象状況を問い合わせている。喘息の関係で、彼は実害をもたらす可能性のある気象状況に常人以上の配慮を払わねばならない生活をおくっていた。それが作品内で気象への反応として現れていると考えられる。病因については、心因性が器官性かで議論の別れるところだが、本論ではその問題に立ち入らず、作品内の気象との関連で論じたい。

主人公の病気と気象の関係は、カプチン僧の格好をした晴雨人形のエピソードで、「雨の到来だけが鎮めることができる咳込み」(Ⅲ, 522)と直接語られたり、カンプルメール氏から、

主人公の咳込みは気象の変化に関係する、という明快な忠告（Ⅲ，509）を受けたりすることで明らかである。しかしブルーストは、主人公の場合ばかりでなく、他の登場人物における気象と病気との関連性も指摘することを忘れていない。

コンプレーの家のベッドでほとんど寝たきりの生活をしているレオニ叔母は、それでも晴れた日には散歩に出かけたいと思う。祖母は、風、雨を愛しているながら、バルベックの暑さにやられ、天気の良い日ジャン＝ゼリゼ公園のトイレで尿毒症の発作を起こす（Ⅱ，603-608）。スワンは湿気が多いと持病の湿疹がで（Ⅰ，275）、シャルリュスは気象の変化で傷みのでるリューマチ気味で（Ⅰ，110）、また冷気を感じるとくしゃみをする（Ⅲ，462）。ヴェルデュラン夫人は住居の気象環境にうるさく、スワンの住む通りは湿度が高く湿疹にはよくないと忠告し（Ⅰ，592）、彼女の別荘のあるラスプリエールはその空気で不治の病の人を治したと自慢する（Ⅲ，362）。ベルゴットは寒さに弱く、いつも厚着をしている（Ⅲ，689）。『ジャン・サントゥイユ』でも、レヴェイヨン公爵は風が吹くと治るといふ神経痛で<sup>20)</sup>、作家Cは枯草病で<sup>21)</sup>、郊外へ行けない。

主人公の喘息は、感性のレヴェルばかりでなく、『失われた時を求めて』という小説の大きな流れの中でも不可欠の要素になっている。周知の通り、コンプレーの回想はマドレーヌ体験に始まるが、このエピソードで見逃せないのはその時の状況である。寒い冬のある日、習慣に反して母が帰宅した私の身体を暖めるために紅茶をだしてくれたのである。主人公の場合、身体を暖めるということは、いうまでもなく寒さからくる喘息を避けるという目的をもっている。かってレオニ叔母は、月桂樹のせんじ葉を彼に飲ませたこともあった。つまり、この出発点においてすでに、気象と喘息の関係は物語に深く根をおろしている。その後のジルベルト、アルベルチヌへの恋も、彼女たちの健康美、活動性への憧れを抜きには考え難い。幼少からの夢の地、バルベック、ヴェニスへの旅行も、それらが共に海辺で、喘息に苦しむ者にとっては保養地でもあったのである。ロベール・スーポーによると、喘息の原因は、ひどい寒さ、風、湿気、汚れた空気、ほこり、霧、花粉であるといい、治療には、快晴、暖かさ、雨、海の空気、大気を洗う気象状況が必要という<sup>22)</sup>。主人公の喘息とは直接関係はないが、ゲルマント公爵夫人との交際のきっかけとなり、物語全体を大きく展開させることになった、夫人と同じ館への引越しは、祖母によい空気を吸わせるためという転地の意味をもっていたことを忘れてはならない。

このように喘息と気象の関係は、主人公の感性ばかりでなく、物語の流れの中においても看過できないのである。

## 結 び

ブルーストの世界においては、気象状況は突然変化する。19世紀的小説のように、物語の都合に合わせるのではなく、不意に室内に吹き込む風のように、前触れなく変わり、物語はその後を追いかける。物語が内的世界の反映であるとすれば、ブルーストにとってそれは当然の成行きであった。というのも、彼のマイクロコスモスは、先行する大気現象に同調し、その後を追ったときには過去を、ときには未来を写しだす鏡であるからである。

こうした気象の位置づけは、いうまでもなく、気象状況によって発作が起こったり鎮まったりする彼の病、喘息からきている。幼年の頃から51才で死ぬまでこの病に苦しめられてきたブルーストにとって、喘息は科学を越えた力、意志と知性では統御できない力であった。彼にとって残された道は、その力に逆らわないこと、そしてその力を逆手にとって、母の愛と創作の時間を確保することであった。従って、その喘息をひきおこす気象の変化に敏感で、かつ従順で

あったのも当然であった。気象の変化とは関係なく自分の生活のリズムを作り出せる健康人とは違って、彼は生活の方を気象に合わせてならなかったのである。

喘息は、プルーストの認識のあり方にも影響を与えている。彼にとって現実、気象の要素が加わって初めて意味を持ち、他者に対する見方も、その人物が気象の変化を苦にするかしないかが、一つの判定基準となる。

このようにプルーストにとって気象は、精神と作品世界に大きな影を落としている。言い換えれば、プルーストは、科学の発達した20世紀初頭においてなお、古代人のような、気象に対する喜びと恐れという素朴な感情を忘れず保持していたといえよう。

## 注

- 1) 能沢源右衛門『気になる気象の話』（成山堂書店、1991、pp.44-46）によると、気象学的には気象は7つの要素、つまり気温、湿度、気圧、風、雲、降水、視程（ある地点で遠方の目標物が正確に認められる最大距離）から成るといふ。しかし本論の「気象学」はより広義で、太陽光線、月光といった視覚的なものや、風でも部屋に吹き込むすきま風をも含めた、身体を取り巻く全般的な現象ととらえられている。参考までに言えば、「天気」とは「大気中のある場所、ある時刻の状態とそこで起こっている諸現象」（同書、p.47）を、「気候」とはある土地における30年以上にわたる平均的気象状況（同書、p.49）を、「天候」とは、「比較的短い期間の天気の状態。天気のように」（広辞苑）を指す。
  - 2) 底本には新版の *A la recherche du temps perdu*, tomes 1-IV, Pléiade, 1987-1989を使用。ローマ数字は巻数、アラビア数字はページ数を指す。
  - 3) フランスでは1856年から。
  - 4) ジッド『田園交響曲』（神西清訳）、新潮文庫、1966、p.6
  - 5) サルトル『嘔吐』（白井浩司訳）、人文書院、1969、p.204
  - 6) バルザック『谷間のゆり』（上巻）（宮崎嶺雄訳）、岩波文庫、1960、p.257
  - 7) 同書（下巻）、p.60
  - 8) フローベル『感情教育』（上巻）（生島遼一訳）、岩波文庫、1971、p.230
  - 9) 同書（下巻）、p.192
  - 10) ロプ＝グリエ『嫉妬』（白井浩司訳）、集英社、1977、p.5
  - 11) 同書、p.7
  - 12) *Jean Santeuil*, Pléiade, 1971
  - 13) 「サントゥイユ氏はどんな天気も苦にしない人だから。．．」（*ibid.*, p.498）（*Jean Santeuil*からの訳は全て、鈴木道彦氏の訳による。）
  - 14) 「そして食卓を離れるときになると、まだ消化が始まってしまううちにトルピック氏は、雨や雪が降ろうが風が吹こうが、妻をせきたてて二時間の散歩に連れ出し。．．」（*ibid.*, p.227）
  - 15) 「非常に頑健な身体であつたから、Cは他のどんな天気よりも荒天を好み、しばしば着物をぬいで船からとびこむと、数時間ものあいだ船のあとを追って泳ぐのであつた。（．．）月が出ていようが、また反対に悪天候であろうが、どんな天気でも彼には気に入つたのである。」（*ibid.*, p.188）
  - 16) Jean-Pierre Richard ; *Proust et le monde sensible*, Seuil, 1974, p.46
  - 17) J.-Francis Reille ; *Proust : le temps du désir*, Les éditeurs français réunis, 1979, pp.69-78
  - 18) ルソー『告白』（上巻）（桑原武夫訳）、岩波文庫、1965、p.71
- もっとも別のところでは、「その時、その場所、人々だけでなく、まわりにあったあらゆる事柄、大気の温度、その香気、その色彩、その場所固有の印象までよみがえるのだ。」（同書、p.175）とも述

べている。

19) *Jean Santeuil*, p.218

20) *Ibid.*, p.336

21) *Correspondance de Marcel Proust*, tome IV, Plon, 1978, pp.209-211 (訳は、「ブルースト全集16」, 筑摩書房, 1989, pp.358-359 による。)

22) *Jean Santeuil*, p.490

23) *Ibid.*, p.490

24) Robert Soupault ; *Marcel Proust du côté de la médecine*, Plon, 1967, pp.223 et 226

## RESUME

Dans l'univers proustien, le temps change soudain. Il ne change pas en suivant le courant d'une histoire comme dans les romans du 19<sup>e</sup> siècle, mais c'est par hasard que le ciel fait voir un visage différent chaque fois. Chez Proust, au contraire, c'est l'histoire qui poursuit le changement du temps.

Cette métamorphose du temps chez Proust est due à ses difficultés asthmatiques, dont il a souffert presque toute sa vie. On sait bien que l'une des causes de sa maladie est le changement du temps. Proust n'avait d'autre choix que de s'adapter au changement continu du temps. C'est pour ça qu'il est beaucoup plus sensible au temps que les personnes bien portant.

Pour Proust, le monde réel n'aurait pas assez de signification si l'on n'y ajoutait pas le facteur "temps". Aussi, pour juger les autres, il veut savoir comment ils se comportent quand il fait beau et mauvais. Car il a toujours eu une conception primitive de l'effet du temps sur l'individu.

Ainsi, le temps exerce une grande influence sur le monde psychique et l'oeuvre de Proust.

